

## フランスの姉妹校との国際交流（2026.4.20～23）

本校はキリスト教教育修道士会（通称ラ・サール会）によって設立・運営されております。ラ・サール会の本部はローマにあり、全世界約 80 カ国の約 1000 の学校を運営しています。

この度、フランスのサン＝ドニ（Saint-Denis）にあるラ・サールスクールから、4 名の教員に引率されて 22 名の生徒が本校を訪問しました。



この学校は 1708 年、聖ラ・サール自身が設立して以来 300 年を超える歴史を有し、現在では小学校から高等教育課程までを備えた総合教育機関として、2400 名を超える生徒が在籍しています。

来日する生徒たち全員が柔道経験者で、日本での練習を強く希望しているとのことでしたので、校長や柔道部の顧問を中心に歓迎プランを練り、芸術やネイティブの教員による英会話の授業に参加してもらい、さらに放課後は柔道部員とともに練習するという計画を立てました。

生徒たちがうまくコミュニケーションを取れるだろうかという私たちの心配は杞憂でした。生徒たちの緊張は最初だけで、すぐに身振り手振りを交えてコミュニケーションを取れるようになりました。昼休みにはカフェで昼食を摂るフランスの生徒のところに本校の生徒が気軽に寄っていき、ランチを通じた交流もできました。また、柔道を通じて、両国の生徒たちに深い絆が生まれたことも特筆に値します。



4 月 24 日、皆さんは無事帰国しました。同校のブログには、今回の日本訪問、特に本校訪問の詳細な記事が、大量の写真といっしょに投稿されていますので、興味をお持ちの方はぜひご覧ください。左は最終日の記事の冒頭で「われらが友 ラ・サール カゴシマ」と書いてくださっています。同校ブログのトップページは <https://www.isdjam.fr/blog/> です。

以下はこの交流にあたり、本校の中心となって動いた柔道部顧問（本校体育科教員）の所感です。

### フランス・ラ・サール(サン＝ドニ)との交流を振り返って

この交流は、2025 年 1 月にサン＝ドニのラ・サールスクール（以下「サン＝ドニ」）の教員より、本校へ連絡をいただいたことに始まります。サン＝ドニでは、柔道を教育の柱の一つとしたスポーツセクションが設けられており、その教育課程の中に海外研修が位置づけられています。日本での研修もその重要なプロジェクトの一つであり、明確な教育的目的をもって、1 年以上の準備期間をかけて計画されました。その過程で、日本にもラ・サールの学校があり、しかも柔道部を有していることをサン＝ドニ側が知ったことから、本校へ連絡があり、この交流が実現しました。

来日したのは、生徒 22 名（13～17 歳の男子 15 名・女子 7 名）と、引率教員 4 名（校長、体育教師、柔道部顧問、英語教師）でした。同校はこの交流を単なる物見遊山ではなく重要な教育活動と位置づけて、極めて重視しており、そのため校長先生自らが生徒を率いて日本まで来られました。サン＝ドニの生徒たちは、大阪・奈良・京都・広島を巡った後、日本での最後の訪問地として鹿児島、そして本校を選んでく

れました。そのことは本校にとって大きな喜びであり、深い感慨を覚えました。

担当教員同士は事前にメールでやり取りを重ね、2026年4月19日、鹿児島県武道館での柔道練習の場で実際に初めて対面しました。最初こそ互いに緊張しましたが、教員同士が力強く握手を交わして、その距離は一気に縮まりました。その後、鹿児島の柔道クラブ、本校高3の柔道部員、そしてサン＝ドニの生徒全員で合同練習を行い、言葉を超えた交流が自然に始まりました。

サン＝ドニの生徒の中には体格の大きい者もいれば、中学生になったばかりの者もいましたが、全員が柔道経験者であり、初対面の際には深々と日本式の礼を行い、校長や教員に対して「SENSEI」と呼びかける様子も印象的でした。

会話は英語が中心となるため、当初はコミュニケーションに不安もありましたが、簡単な英語でのやり取りは十分に可能で、高校生の中には流暢に会話する生徒もいました。

翌20日にはサン＝ドニの皆さんが本校にられました。本校では、校長および柔道部顧問を中心に受け入れ体制を検討し、芸術科および英語科の協力を得て、授業での交流と柔道練習を柱としたプログラムを用意して一行を迎えました。

20日に校長によるオリエンテーションおよび副校長による校内案内、英語の授業が行われ、本校柔道部員との本格的な交流が始まりました。また、鹿児島県柔道会会長による柔道の歴史と技術に関する講義も行われ、専門的な学びの機会となりました。21日は美術・書道・英語の授業および部活動への参加、22日は鹿児島市内および桜島の見学を通して、日本文化への理解を深めました。

21日の美術では和紙を用いた作品制作が行われ、書道では本校生徒がサン＝ドニの生徒に手を添えて指導する場面が見られました。英会話では、授業の展開につれて英語を介した日仏生徒のコミュニケーションが深まり、同校の教員・生徒ともに強い感銘を受けた様子でした。

連日、柔道で組み合い、授業で時間を共有する中で、両国の生徒の距離は急速に縮まりました。柔道の稽古後には、下校時間ぎりぎりまで写真撮影や会話が続き、別れを惜しむ様子が見られました。練習後、フランスの生徒たちが深々と礼をする姿は特に印象的で、日本の武道への敬意が強く感じられました。

また、校内では本校生徒が「ボンジュール」と声をかけると、サン＝ドニの生徒が「こんにちは」と返すなど、互いの言語を用いた交流も見られました。昼休みにはカフェを中心に自然な交流が生まれ、学年を超えて多くの生徒が互いに話しかけ合う光景は非常に印象的でした。

23日には最後の柔道練習とお別れ会が行われ、教員・生徒双方からのメッセージ交換やプレゼント交換が行われました。ともに「ONE LA SALLE」( <https://www.youtube.com/watch?v=jafez4R4fyw> ) を歌い、改めてラ・サールスクールとしての一体感を感じる機会となりました。

この日の夕食では、校長、副校長とともに交流の時間をもち、日本での思い出やフランスのラ・サールについて語り合いました。別れの際には「ぜひサン＝ドニに来てほしい」という言葉とともに固い握手が交わされ、深い絆が生まれたことを実感しました。

サン＝ドニの皆さんは、4月24日、鹿児島から福岡、上海を経由してフランスへ帰国し、無事到着したとの連絡を受けました。また、日本で過ごした時間や本校の生徒たちと過ごした時間が「非常に素晴らしいものであった」との言葉をいただき、私たちにとっても大きな喜びとなりました。

今回の交流は、サン＝ドニと鹿児島という、場所こそ異なるものの同じ教育理念を共有する学校同士が、柔道と教育を通して深く結びついた、極めて意義深いものとなりました。今後もこのような交流が継続され、お互いのさらなる教育的発展につながることを期待しています。



今回の日本研修のポスター(同校 HP より)





